

所 報

1. 所員の移動についての報告

1988年4月から2年間にわたって教育研究所長をされた星野命教授が、1990年3月退職された。代わって、中野照海教授が1990年4月より教育研究所長に就任された。

ICUにおいて長年にわたって英語教育に携わってこられたRichard Linde教授が1990年6月退職された。

2. 研究所活動報告 (1989年9月～1990年8月)

1. 講演会

1989年12月8日：村上陽一郎 東京大学教授「高度に発達した科学技術文明とその意味」

2. 研究員

2. 研究員 I (Research Fellows)

- (1) 道又 爾, 明治学院大学助教授 Ph. D. 住所：東京都武蔵野市, 研究題目：言語機能の実験心理学的研究, 研究期間：1990年4月～1991年3月, 指導教授：原一雄
- (2) Robert Solodow, Ph. D., 本籍：米国, 在住地：東京都渋谷区, 専攻：臨床心理学, 研究題目：ライフダイナミックスセミナー参加者の社会的態度, 信念変化の経年的効果に関する研究, 研究期間：1990年4月26日～1991年4月25日, 保証人：中野照海

研究員 II (Research Associates)

- (1) 岩佐玲子, 国際基督教大学修士号 (教育学), 埼玉大学教育学部及び昭和女子大学非常勤講師, 住所：東京都三鷹市, 研究題目：教育機器の導入によって行われた教育革新の構造に関する実証的研究, 研究期間：1990年4月～1991年3月, 指導教授：中野照海
- (2) 塚本美恵子, コロンビア大学 M. A. 住所：埼玉県入間市, 研究題目：新しい環境での子供の適応, 研究期間：1990年4月～1991年3月, 指導教授：栗山容子

- (3) 服部純子, 国際基督教大学修士号(教育学), 住所: 東京都三鷹市, 研究題目: 南紀3地域(沿岸と内陸)における住民意識調査, 研究期間: 1990年4月~1991年3月, 指導教授: David W. Rackham
- (4) 原 和子, 元東洋英和女学院教諭, 住所: 東京都港区, 研究題目: 海外帰国生徒教育, 研究期間: 1990年4月~1991年3月, 指導教授: 栗山容子

3. 助 手

非常勤助手 (Part-time Assistant)

- (1) 川津茂生, コーネル大 M. S. 住所: 千葉県船橋市, 期間: 1990年4月~1991年3月

研究室活動報告

教育哲学研究室

I 人の動き

結城敏也副手は1990年3月に退任。大川 洋(1990年4月より) および深谷 潤(1990年4月より) 副手に就任。パク・インヒョ(シモンズ大学哲学科) 教授を1989年9月1日~1989年12月31日まで客員教授として招く。

II 研究活動

<共同研究>

- * 「日米四年制大学における単位制度の実態と将来像に関する比較調査研究」
(平成元年度文部省科学研究費補助金交付一般研究C) 研究代表者: 讃岐和家教授
- * 「アメリカ高等教育における能力観と制度変革とに関する史的研究」
(平成元年度文部省科学研究費補助金交付総合研究A) 研究代表者: 立川明準教授

<講演会>

- 1989年11月22日: 山本敏幸氏「タイのフリー・スクール, 子供の村学園の現状」
- 1989年12月6, 13, 20日: パク客員教授 “Reason and Tradition—Current Philosophical Debates—” (講演記録を3月に出版)
- 1990年2月19日: 磯田一雄教授「旧満州国の教育」

<研究会・その他>

- 1989年9月9日：大学院教育哲学研究室研究会（修士論文中間発表を中心に）
- 1990年2月5日：教育学科教育学専修生卒業論文・大学院教育哲学専修性修士論文発表会
- 1990年4月25日：ICU 教育哲学研究会年次総会
- 1990年4月28日：大学院教育哲学研究室研究会（新入生の研究計画を中心に）
- 1990年8月5～7日：ICU 教育セミナー（八王子大学セミナーハウスにて、卒業生教員，学部生，院生，およびICU 教員が参加）山口和孝埼玉大学助教授の講演があった）

讃岐和家教授

研究活動

1. 「現代日本における大学教育改革の方策」とくに「単位制度空洞化の克服の方策」について研究を行った。
2. 本学の原 一雄教授を研究代表者とする文部省科学研究助成金による「ファカルティ・ディヴェロップメントに関する研究」に研究分担者として参加した。
3. 日本教育学会会長の大田 兗教授を研究代表者とする文部省科学研究助成金による特別研究「教育学用語標準化の調査研究」に研究分担者として参加した。

学会発表・参加

1. 1990年3月14日，筑波大学大学研究センターで行われた研究会「大学入試を考える」において「国際基督教大学の入学試験」と題する報告を行った。
2. 1990年6月2～3日に行われた一般教育学会大会（於・桃山学院大学）において，自由研究2「一般教育のプログラム・カリキュラム」の司会を森 毅教授とともにつとめた。

論文・著作

1. 「今日の大学における教授方法改善の課題」，筑波大学大学研究センター『大学研究』第5号，1989年12月発行，1～17頁。
2. 「単位制の空洞化を克服する方策——学生の学習の質的改善に向けて——」，関正夫編『大学教育改革の方法に関する研究——Faculty Developmentの観点から——』広島大学大学教育研究センター，1990年3月発行，45～50頁。
3. 「単位制度問題と一般教育」，大学基準協会『会報』第64号，1990年4月発行，47

～56頁。

4. 「授業時間と単位」, 民主教育協会『IDE——現代の高等教育』第315号, 1990年7月発行, 16～20頁。

その他

1. 一般教育学会, 学会事務局長, 常任理事, 学会誌常任編集委員。
2. 日本キリスト教教育学会, 常任理事。
3. 教育哲学会, 監査。
4. 日本学術会議, 教育学研究連絡委員会, 委員。
5. 文部省, 一般教育視学委員会, 委員。
6. 三鷹市, 教育委員。
7. 民主教育協会, 「学生生活セミナー」の全国セミナー企画委員会, 委員, および「関東甲信越地区セミナー」実行委員会, 委員。

川瀬謙一郎教授

研究活動

1. 宗教社会学における人格形成の研究。

ベンジャミン・C・デューク教授

Research Activities

Field Trip to America and Britain for research and interviews on EDUCATION AND LEADERSHIP FOR THE 21ST CENTURY : JAPAN, AMERICA AND BRITAIN

Professional Activities

English Editor, Japanese Journal of Education

Publication

TEN GREAT EDUCATORS FROM MODERN JAPAN, Tokyo University Press, 1989

立川 明準教授

研究活動

文部省の科学研究費補助金総合研究(A)は, 第二年度(最終年度)に入り, 1989年1月には箱根において第二回の全体研究会, 本年の7月には武蔵野市において第三回

の全体研究会を開催し、それぞれ全国から約20名が参加した。なお箱根では、本学心理学 David Rackham 助教授、また武蔵野市では米国ウィスコンシン大学教育史 Carl F. Kaestle 教授から、それぞれ講演を通して専門知識の供与を得た。特に記して感謝したい。

個人の研究課題は、19世紀アメリカ人思想家 Orestes A. Brownson の知識人批判と、20世紀前半のアメリカ・カレッジにおけるオーナーズ・プログラムの導入とその挫折であった。両者とも論文にまとめた。後者は特に米国の教育史学会において発表の予定。また学術研究の国際交流の問題も検討課題とした。

学会参加

上記研究会を主催した他、アメリカ研究札幌クール・セミナー（於・北海道大学）7月31～8月3日、日本教育学会（於・九州大学）8月29～31日等に参加した。

著 作

- (1) “Review of Horio Teruhisa’s *Educational Thought and Ideology in Modern Japan.*” *History of Education Quarterly*, XXIX, 4(Winter 1989),638–641.
- (2) “Will One Have to be Trained ‘Nationally’ First in order to be Educated ‘Internationally?’” David Whittaker, ed. *International Relations, National Policies, and Higher Education in the Pacific Region*, (Proceedings of the 1989 PRAHE Annual Conference at UC–San Diego), 1990, 161-167.
- (3) 「現代日本の高等教育－パネル発題」『教育研究』32, 1990, 200-206.
- (4) 「国際基督教大学」『海外子女教育だより』35, 1990, 71-72.
- (5) 「日本留学フェアを振り返って」『留学交流』Ⅱ, 4, 1990, 20-21.
- (6) 「大学受験にそなえて－ SAT, TOEFL に関する取り扱い」『海外子女教育だより』37, 1990, 1-2.
- (7) 「スミス・ヒューズ法」『新教育大事典』 第一法規出版, 1990所収.

その他

日本教育学会『教育学研究』 英文校閲係・常任編集委員

林 昭道助教授

研究活動

1. 前年に引きつづき、近代ヨーロッパ教育思想史研究。

2. 教育の諸概念の成立史（特にゲーテ、シュプランガーを中心にして）。

影山礼子副手

1. 研究活動

「成瀬仁蔵の教育思想」のテーマで博士論文執筆中。

2. 学会発表等

- ① 1989年10月 「成瀬教育からの人間群像(1)——社会事業における谷野せつ（婦人工場監督官）の思想と実戦」 教育哲学会第32会大会（京都大学）
- ② 1990年7月 「成瀬仁蔵と渋沢栄一——日本女子大学校と婦一運動における協調」 渋沢研究会月例会（渋沢記念館）
- ③ 1990年8月 「成瀬仁蔵と渋沢栄一——二人の交流と思想的接点」 日本女子大学成瀬仁蔵研究会夏期研修会（日本女子大学軽井沢三泉寮）

3. 論文・著作

定稿提出，校了のものが3編あるがいずれも10月以降出版予定。

深谷 潤副手

1. 研究活動

- ① カール・ヤスパースの教育哲学研究
…人間存在の哲学的考察（実存，自由，哲学的信仰，交わり 論）
- ② キリスト教教育の問題点と可能性に関する研究

2. 学会・研究会参加等

- ① （財）キリスト教教育センター主催のキリスト教教育研究会の月例会（於・青山学院大学）に参加
- ② 第32回教育哲学会 1989年10月16～17日（京都大学）に参加

3. 論文

「カール・ヤスパースの＜哲学的信仰＞に関する一考察——その教育哲学的意義をめぐって——」（国際基督教大学大学院教育学研究科提出教育学修士論文 1989年12月）

大川 洋副手

1. 研究活動

- 1) エラスムスの教育思想を『子どもの教育について』（*De pueris instituendis*,

1529)を中心に研究している。特に、この著作が修辞学の模範文として執筆されたことに着目することによって、教育思想解釈にどのような新しい視点が得られるかを様々な角度から検討している。

- 2) 上記の研究の一環として「エラスムスの子ども観」を研究。この研究の成果を教育哲学会第33会大会（1990年10月20日，中央大学）において発表の予定。
- 3) 「エラスムスの『子どもの教育について』（1529年）の成立に関する研究」という学位論文を執筆中。また、「エラスムスの教育論における民衆教育の視点」，および「コメニウスの教育思想に与えたエラスムスの影響」について研究発表準備中。

2. 学会発表

「エラスムスの教育論における宗教教育の位置」，日本キリスト教教育学会第2回大会（1990年5月19日，聖和大学）。

3. 研究論文

「ラブレールの教育思想に与えたエラスムスの影響」（『フランス教育学会紀要』第2号，1990年，19～30頁）。

4. その他

- 1) 「晩年の御著述のお手伝いをさせていただいて」（金子伝太郎編『追想 金子武蔵』1989年，233～235頁）。
- 2) フランス教育学会の幹事を委嘱される（1989年9月23日～）。
- 3) 平成元年度・2年度文部省科学研究費補助金交付研究「フランスの道德・公民教育に関する総合的研究」（研究代表者 石堂常世）の研究協力者となり、「フランスの道德・公民教育に関する文献目録」の作成を補助した。

心理学研究室

人の動き

1990. 3. 31 星野 命教授，本学を退任，北陸学院短期大学学長に就任される。

1990. 4. 1 小谷英文助教授，準教授に昇格。
乙竹佐和，巖岩秀章，井上直子，井尻多希子，野村 学，岡林秀樹，鈴木千尋，非常勤副手に就任。

非常勤講師

- 1989 秋学期 平木典子（立教大学学生相談所カウンセラー・教授）
「EPS 561J」ガイダンス・カウンセリング研究Ⅱ」
- 1989 冬学期 鳥居修晃（東京大学教養学部教授）
「EPS 352J 知覚と認知の心理学」
榎本 稔（東京工業大学）
「EPS 465J 教育心理学研究Ⅴ」
中村陽吉（学習院大学文学部教授）
「EPS 472J 教育心理学研究Ⅵ」
無藤 隆（お茶の水女子大学家政学部助教授）
「EPS 380J 言語心理学」
- 1990 春学期 青木孝悦（千葉大学人文学部教授）
「EPS 444J 教育心理学研究Ⅳ」
平木典子（立教大学学生相談所カウンセラー・教授）
「EPS 461J」ガイダンス・カウセリング研究Ⅰ」

研究活動

- 原 一雄 文部省科学研究費（一般研究B）「大学教員のための教授資質開発（FD）プログラムの策定と実践的試行」（研究代表者）
警察庁科学警察研究所「少年相談の効果的推進法に関する調査研究」（研究代表者）
- 栗山 容子 厚生省研究助成金「ハイ・リスク児のフォロー・アップ・スタディー—ハイリスク児の発達状況・行動特徴と，これに影響を及ぼす家庭要因に関する縦断的研究—」（代表 東京慈恵会医科大学教授前川喜平）
国際交流基金 'Pictorial Experimental Paradigm for Separation and Death Anxiety Assessment' (Representative, Dr. Esther Halpern)
- 小谷 英文 広島県教育委員会「個別性を重視した教育態度の再教育プログラム

の実践的開発」(研究オーガナイザー)

長谷川病院「慢性分裂病者の期間制限集団精神療法の技法構成」
(研究代表者)

その他個人・院生, 関係諸機関との共同研究

RACKHAM, David W.

The adaptive significance of a simple associative learning capability discriminative Pavlovian conditioning in the domestic pigeon, *Columba livia*, and the black bass, *Micropterus salmoides*.

Cooperative problem solving behaviour and decision-making strategies in a cross-cultural context using a modified version of the Prisoner's Dilemma Game (with Professor Yoko Kuriyama).

Implications of Edelman's theory of Neural Darwinism for an understanding of cross-cultural differences in perception and cognition (with E. C. P. Stewart).

Significance of the historical record in undergraduate instruction in psychology.

心理学談話会・講演会

1989. 10. 31 栗山容子「ISSBD第10会大会に出席して」
RACKHAM, David W.「異文化間における知覚・認知的差異に関する物質主義解釈に対する神経ダーウィニズムの意味」
1990. 2. 26 星野 命「私の社会心理学」(星野教授「最終」公開授業)
4. 24 小谷英文「心理臨床家教育と心理臨床家の将来」
5. 29 栗山容子「分類課題における日米母親の教授スタイル」

論文発表会

1989. 9. 26 卒論中間発表会(1)
10. 3 卒論中間発表会(2)
10. 27 修論中間発表会
1990. 1. 19 修論発表会 発表者 8名
2. 9 卒論発表会 発表者 26名
5. 29 卒論計画発表会(1)

6. 5 卒論計画発表会(2)
6月卒業生卒論発表会 発表者 2名
6. 12 卒論計画発表会(3)

セミナー

1990. 7. 2-5 心理学サマー・セミナー (主題: Transition—一人が成長するとき)
於 八王子大学セミナーハウス
参加者 教員6名, 院生・学部生76名, その他3名, 計85名
(実行委員長 西村 馨, アドバイザー D. Rackham 助教授)

その他

1990. 2. 16 星野 命先生を送る会 参加者52名
於 大学食堂イーストルーム
3. 7 非常勤講師慰労会 於 壺中房

修士論文

1990年3月卒業者

- 中川 泉 中高年の運動体験に関する質的分析——26名の面接調査より——
- 鷲見恵美子 Wynneの偽相互性理論に関する一研究——合意ロールシャッハ法による家族事例の分析と共に——
- 藤田 宏紀 「間を取る」概念の明確化に向けて——フォーカシング技法における“clearing a space”段階の検討——
- 服部 純子 先住者のカナダへの移住がもたらした和歌山県三尾住民の社会意識の変容
- 早川 枝里 青年女子の母親イメージの発達と自我同一性に関する一考察
- 北嶋 美枝 在日韓国・朝鮮人のエスニック・アイデンティティに関する一研究
- 工藤 博 ペルー国リマ市における国内移住者の精神衛生に関する一研究
- 野末 武義 健康な家族システムの発達課程に関する事例研究

原 一雄教授

I. 研究活動

1. 神経心理学的研究: カフェインの学習に及ぼす精神薬理的効果
2. 教育心理学的研究: 大学生の価値観と教育環境の評価

3. 高等教育に関する研究：

- a) 大学教員の教授資質開発 (FD) プログラムの実践的試行
- b) 一般教育カリキュラムの開発

II. 学会発表等

1. 「大学評価の可能性を問う：私立大学の試みから」 広島大学大学教育研究センター第18回研究員集会（於広島大学大学教育研究センター 1989.11.11）
2. 「大学教員の自己評価」 第26回大学教員懇談会（於八王子大学セミナー・ハウス 1990.1.21）

III. 著 作

1. 「国際基督教大学における大学教育研究体制の構想」 『一般教育学会誌』 11 (2), 16-19. 1989.11.
2. 「大学教員の自己評価（学生評価を含む）」 大学教員懇談会FDプログラム小委員会編『大学教員の魅力開発——FDプログラムの実践——』 204-214 1990.1.16
3. 「国際基督教大学の教育改革（第3章） II Faculty Development活動の現状と課題」 関 正夫編『大学教育改革の方法に関する研究 — Faculty Developmentの観点から』 39-44 1990.3.1.
4. 「大学キャンパスの認知マップ：（その1）教育環境の意味次元と学園施設の評価」（大井直子・川戸さえ子共著）『教育研究 国際基督教大学 学報 I-A』 32, 23-39.
5. 「大学キャンパスの認知マップ：（その2）教育プログラムの評価と教育環境の役割」（川戸さえ子・大井直子共著）『教育研究 国際基督教大学 学報 I-A』 32, 41-60.
6. 「単位制度と必修・選択制」 財団法人大学基準協会『会報 第64号 特集 単位制度をめぐって』 16-22 1990.4.28

IV. その他

1. (発題) “Higher education and world peace.” at The International Meeting on Peace. (於バンコック市 1989.11.26)
2. (講演) “Current issues on staff and faculty development in Japan.” (於チュラロンコン大学 1989.11.29)
3. (発題) 「大学生の価値観」 教育学科フレッシュマン・リトリート (於八ヶ岳

泉郷 1990.5.18)

4. (研究助成金) 文部省科学研究費 (一般研究B) 「大学教員のための教授資質開発 (FD) プログラムの策定と実践的試行」 (研究代表者)
5. (研究助成金) 警察庁科学警察研究所 「少年相談の効果的促進法に関する調査研究」 (研究代表者・カウンセリング研究会委員長)
6. 学会役職
 - (1) 日本心理学会, 英文アブストラクト校閲委員
 - (2) 日本基礎心理学会, 常任運営委員, 『基礎心理学研究』誌常任編集委員
 - (3) 日本生理心理学会, 常任運営委員
 - (4) 一般教育学会, 評議員, 『一般教育学会誌』常任編集委員, 学会事務局幹事
 - (5) 『J. of Neurolinguistics』誌 Associate Editor

栗山容子準教授

I. 研究活動

1. 幼児期の不安に関する研究
 - 1) 幼児の分離による不安と死の不安の文化交差的研究
 - 2) 幼児期の分離による不安と母親の子どもに対する意識の関連
2. ハイ・リスク児のフォロー・アップ・スタディ
ハイリスク児の発達状況・行動特徴を認知発達の面から縦断的に追跡調査を実施するための検査用具の選定とケースのスクリーニングのための調査
3. Prisoner-Dilemma Game による集団の決定方略の検討—海外経験のない日本人学生と帰国生の比較
4. 教育実習生の評価の問題
教授スキルの評価尺度の検討とフィードバックのための評価票の作成

II. 著作

1. 「2～4歳児の象徴遊びと玩具の役割」玩具文化 No.6 1989. December

III. その他

1. パネリスト 「第3回 玩具文化フォーラム —おもちゃと人形—」 1989. 11.10 於 青山こどもの城
2. 講演 「子どもの発達心理・学童期—親と子のかかわり—」 1989.11.20 於 小金井市公民館

小谷英文準教授

I. 研究領域

1. 精神療法技法

1) 個人精神療法 2) 集団精神療法 3) コンバインドセラピー 4) 集中合宿アプローチ の各種治療的介入の検討開発と技法構成のシステム論的研究

2. 難治事例の心理力動理論

シゾイド・プロセスとその修正発達の展開の理論構成

3. 精神療法のトレーニングメソッドの開発

1) 応答構成法 2) ロールプレイ法 3) シナリオロールプレイ法 4) プロセス・グループ 5) 体験グループ 6) 陪席観察法 7) スーパービジョン法

II. 著作

1. 「「情短」における集団心理学的視点と集団心理療法」杉山信作編 『子供の心を育てる生活一チームワーク治療の実態』星和書店 1990, 4, pp.289-295.

2. 「集団心理療法」小此木啓吾・成瀬悟策・福島 章編 臨床心理学体系第7巻『心理療法1』金子書房 1990, 9, pp.239-269.

3. 編著「心の相談」「逃げ場を失くした子どもたち」同文書院 1986の改定版 1990, 7.

4. 共著「学生カウンセリング」細木照敏・平木典子編 「学生相談室」同文書院 1984の改訂版 1990, 6.

III. 項目執筆

1. 国分康孝編「カウンセリング辞典」誠信書房 1990 (2項目)

2. 内山喜久雄・上里一郎編「新看護心理学」ナカニシヤ出版 1989 (2項目)

IV. 論文

1. 「コンストラクティヴィズムに学ぶ」心の臨床アラカルト 第9巻2号 1990, pp.25-28

V. 学会発表・参加

1. 日本心理臨床学会 第8回大会 (於：大阪教育大学 1989.9.23-25.)

1) 個人発表・コメンテーター

- 2) 学生相談シンポジウム・ディスカッサント
2. 日本精神分析学会 第35回大会参加 (於:東京 1989.10.21-22)
3. 日本集団精神療法学会 第2回学会研修 (於:東京 1989.11.18-19)
力動的集団精神療法技法ワークショップ 講師
4. 臨床的グループ・アプローチ研究会 第13回年次研究集会
個人発表・スーパーバイザー (於広島 1989.11.23-25)
5. 日本心理学会 第53回大会 (於:筑波大学 1989.11.28-30)
6. 日本学生相談学会研修会 (於:東京 1989.12.10-12)
グループアプローチ分科会 講師
7. 日本集団精神療法学会 (於:東京 1990.1.27-28)
 - 1) 連名発表 一般システムズ理論による個人力動と集団力動の治療的相互作用の展開(1)-仮説理論の提出 (発表:井上直子)
 - 2) 学会シンポジウム 集団精神療法はなぜ有効なのか
シンポジスト 「シゾイド的引きこもりからの脱出と集団力動」

VI. その他

1. 講演

1) 「集団精神療法とTグループ」 立教大学キリスト教教育研究所 (JICE) 1989.9.9.

2) 「面接による人格理解Ⅰ, Ⅱ」 家庭裁判所調査官研修所 1989.11.14,17.

2. 臨床指導・ワークショップ

1) 事例検討指導 家庭裁判所調査官研修所 1989.11.21.

2) 精神分裂病のデイケアと集団精神療法 1日スーパービジョン 広島市精神衛生指導センター 1989.11.22.

3) 「エンカウンターグループ in 東京」 スーパーバイザーおよびファシリテーター

臨床的グループアプローチ研究会 (於:八王子) 1990.3.9-11.

4) 「力動的な精神療法の治療技法」 トレーナー 日精研心理臨床センターワークショップ (於:東京) 1990.3.26-29.

5) 事例検討指導 東京家庭裁判所所内研修 1990.7.9.

6) 「ロールプレイ技術指導」 1日ワークショップ 東京都教育研究所 1990.7.17.

7) 「集団心理療法の理論と実際」 1日ワークショップ 広島市児童総合相談セ

ンター 1990.7.27.

- 8) 精神分裂病の集団精神療法 半日ワークショップ 広島市精神衛生指導センター 1990.7.30
- 9) 第2回エンカウンターグループ宿泊演習講座 広島県教育委員会 プログラムオーガナイザー (於:広島) 1990.7.31-8.3.
- 10) グループアプローチ宮島プログラム プログラムオーガナイザー 臨床的グループアプローチ研究会 (於:宮島) 1990.8.17-22.
- 11) PCAウィークエンド夏合宿 PCAウィークエンド運営委員会 夏合宿実行委員 (於:菅平) 1990.8.27-31.

3. 学会等の役職など

- 1) 日本集団精神療法学会 常任理事 渉外委員長 学会誌編集委員 研修委員
- 2) 日本心理臨床学会 カリキュラム検討委員
- 3) 臨床的グループアプローチ研究会 代表
- 4) PCAウィークエンド 運営委員長

4. 学外講師

- 1) 東京大学教育学部 非常勤講師 「人格心理学Ⅱ」
- 2) 長谷川病院 集団精神療法講師
- 3) 日本精神技術研究所, 心理臨床センター・心理臨床学院 講師

デイヴィッド W. ラッカム助教授

Research Activities

1. D.W. Rackham with E.C.P. Stewart—Analyses of the relevance of Gerald M. Edelman's recent theory of "Neural Darwinism—The Theory of Neuronal Group Selection" to a material understanding of mind in general and perceptual and perceptual/cognitive variations across cultures in particular.
2. D.W. Rackham with Y. Kuriyama—Explorations of decision-making strategies in a cross-cultural context using a modified version of the Prisoner's Dilemma Game.
3. D.W. Rackham — Pavlovian discriminative conditioning in the black bass. *Micropterus salmoides* and the three-spined stickleback. *Gasterosteus aculeatus*.
4. D.W. Rackham — The historical dimension in undergraduate studies in

psychology.

- 5 . D.W. Rackham — Psychological health, spiritual health, and their interrelationships.

Conference Attendances and Presentations

- 1 . “Neural Darwinism and perceptual and cognitive variations across cultures.” Presented at ICU Psychology Forum. October, 1989.
- 2 . Neurolinguistics Conference, ICU, November, 1989.
- 3 . “Reflections on the nature of ‘mind’ by selected 19th and 20th century psychologists.” Paper presented to the American Educational History Research Group, Hakone Research Programme, December, 1989.
- 4 . Neurosciences Seminar, Tokyo, JAPAN, March, 1990.
- 5 . Kyodan—Related Missionary Conference, Sendai, JAPAN, March, 1990.
- 6 . “Implications of Edelman’s theory of neuronal group selection for an understanding of mind.” Presented at the ICU Psychology Summer Seminar, Hachioji, JAPAN, July, 1990.
- 7 . Do psychological health and spiritual health have anything to do with one another?” Workshop presented at ICU Psychology Summer Seminar, Hachioji, JAPAN, July, 1990.
- 8 . Canadian Christian Festival III, Halifax, Nova Scotia, CANADA, August, 1990.

Publications

- 1 . Rackham, D.W.(1990). A search for relevance: the historical dimension in undergraduate studies in psychology. *Educational Studies*, 32, 61—86.
- 2 . Rackham, D.W. Discriminative courtship conditioning in the pigeon, *Columba livia*. Under revision.
- 3 . Rackham, D.W. and Kuriyama, Y. “Cooperative and competitive tendencies in Japanese and Returnee Japanese students in a modified Prisoner’s Dilemma Game.” In preparation for Volume 33 of *Educational Studies* and for conference presentation.
- 4 . The following articles under preparation are based on ideas presented by E.C.P. Stewart and D.W. Rackham under the title “Neural Darwinism—Per-

ceptual Variations Across Cultures” at the 1989 American Psychological Association Annual Convension held in New Orleans, Louisiana, U.S.A.

Rackham, D.W. and Stewart, E.C.P. "The implications of Neural Darwinism for an understanding of the material basis of mind."

Stewart, E.C.P. and Rackham, D.W. "Neural Darwinism and the problem of uniqueness, diversity and uniformity in perception and cognition."

Other Activities

1. English language proof—reading services for Japanese Psychological Association publications and ICU colleagues.
2. Member, Board of Trustees, American School in Japan (ASIJ).
3. Subscription and circulation services on behalf of *The Japan Christian Quarterly*
4. Leader, weekly adult class, West Tokyo Union Church.
5. A variety of ongoing activities of an educational and service nature in connection with missionary associate status with the United Church of Canada and the United Church of Christ in Japan (Kyodan).

向井敦子講師

研究活動

- (1) 対人状況に於ける認知判断と視点との関係
- (2) 集団討議場面に於ける態度と原因帰属
- (3) 対人過程に於ける心理学的意味の規定因の考察

学会発表・参加

- (1) 1989年11月、日本心理学会第53回大会に於いて、「成功—失敗事態の「みなし」に關与する要因の分析 I. 要因の組合せによる一般的傾向 II. 一要因を除外して組み合わせた場合の評価の傾向」を発表（同大会発表論文集p.224-225）（深谷澄男との共同研究、向井はIIを口頭発表）。同発表部門の座長をつとめた。
- (2) 1990年3月、日本発達心理学会第1回大会に出席（於、白百合女子大学）
- (3) 1990年6月、日本心理学会第54回大会に於いて、「他者を通してみた自己の主観的「みなし」と原因帰属」を発表（同大会発表論文集p.200）（深谷澄男との共同研究、向井は口頭発表）。同発表部門の座長をつとめた。

論文

- (1) 「集団討議場面における情況論理的な態度と原因帰属の分析」国際基督教大学
学報 I-A 教育研究32、pp、87-109、1990

井上直子副手

I. 研究活動

- (1) 心理療法における人格機能の治療的变化過程と起因メカニズム
- (2) 集団精神療法訓練法としてのプロセス・グループの可能性
- (3) シゾイド・パーソナリティの力動理解と個人精神療法プロセス
- (4) 一般システムズ理論を軸にした集団精神療法プロセス・モデル理論構成

II. 学会発表・参加

- (1) 日本心理臨床学会 第8回大会 (於：大阪教育大学 1989.9.23-25.) 参加
- (2) 日本精神分析学会第35回大会 (於：東京 1989.10.21-22) 参加
- (3) 日本集団精神療法学会 第2回学会研修会 (於：東京 1989.11.18-19.)
力動的集団精神療法技法ワークショップ トレーニングアシスタント
- (4) 臨床的グループ・アプローチ研究会 第13回年次研究集会 (於：広島1989.11.
23-25.) 参加
- (5) 日本心理学会 第53回大会 (於：筑波大学 1989.11.28-31.)
発表：「一般システムズ理論による人格の不応理論の検討」
- (6) 日本集団精神療法学会 第7回大会 (於：東京 1990.1.27-28.)
発表：「一般システムズ理論による個人力動と集団力動の治療的相互作用の展開
(1) 一仮説理論の提出 (連名発表者：小谷英文)

III. その他

1. 「エンカウンターグループin東京」 ファシリテーター 臨床的グループアプ
プローチ研究会 (於：八王子 1990.3.9-11.)
2. 「力動的な精神療法の治療技法」 トレーニングアシスタント 日本精神技術研究
所・心理臨床センター 第6回ワークショップ (於：東京 1990.3.26-29.)
3. 「第2回エンカウンターグループ宿泊演習講座」ファシリテーター 広島県教育
委員会 (於：広島 1990.7.31-8.3.)
4. 「グループアプローチ宮島プログラム」コミュニティスタッフ 臨床的グルー
プアプローチ研究会 (於：宮島 1990.8.17-22.)

5. 「PCAウィークエンド夏合宿No.152」夏合宿実行委員（於：菅平 1990. 8.27-31.）

視聴覚教育研究室

1. 人の動き

佐々木輝美、和田正人、斉藤由也、高嶋真理子、待鳥敏子、森祐治、工藤嘉名子、藤本泉、南雲弥恵子が、1990年4月より副手に就任した。

また、次の副手が辞任した。

駒井利江（90/3辞任）は1990年3月日本語講師として中国に赴任。

鈴木美加（90/3辞任）は1990年4月、東京外国語大学附属日本語学校の専任講師に就任。

工藤嘉名子（90/6辞任）は1990年9月、日本語講師としてアルバータ州立大学に赴任。

2. 研究活動

1) 第26回日本視聴覚教育学会・第34回日本放送教育学会合同大会

本研究室に事務局を置く日本視聴覚教育学会及び日本放送教育学会の合同大会が、金沢大学を当番校とし、1989年10月8日（日）、9日（月）の両日にわたり開催された。シンポジウム及び課題研究は次のようなテーマで行なわれ、中野教授、石本教授、および大学院生が参加した。

○シンポジウム：「コンピュータは放送教育に何をもたらすか」

○課題研究Ⅰ：「新教員免許法による教職専門科目『教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）』のあり方」

○課題研究Ⅱ：「情報とメディアを統合するインタラクティブな学習環境」

2) 共同研究

鈴木庸子、平形裕紀子、来嶋洋美、駒井利江、高木裕子、高嶋真理子、岡部真理子、谷口聡人、横田淳子（東京外大）、石本教授は、中野教授を代表とする昭和63年度放送文化基金による研究「放送番組を中心とした音声・文字・画像併用外国語学

習パッケージの開発研究」に参加し、日本語学習のプログラム開発を継続して行なっている。

岩佐玲子、浦田俊之、飯吉透、鈴木美加、待鳥敏子、工藤嘉名子は、日本視聴覚教育協会が受けた昭和63年度より文部省補助金による「ニューメディア教材の研究開発事業」（座長：中野照海）に参加し、ハイパーメディア教材の開発を継続して行っている。

佐々木輝美、和田正人は、阿久津教授と共に「テレビ番組別の、接触行動及び充足に関する研究」を行っている。

3) 修士論文発表会

博士前期課程修了者（1990年3月、6月修了）による修士論文発表会を1990年6月25日に行った。

発表者（修了月）	題目
鈴木美加（3月）	外国語としての日本語の読解学習における先行オーガナイザーの効果に関する研究
高嶋真理子（6月）	漢字学習に関する実証的研究 —部首の説明に対する挿入質問の効果について—
樋浦小静（6月）	CAIにおける反応時間フィードバックが基礎的技能の自動化に及ぼす効果に関する実証的研究 —インターナショナルスクールの場合—

中野 照海 教授

I. 研究活動

1. ニューメディア教材の研究開発事業（文部省教育改革の推進に関する研究依頼・日本視聴覚教育協会、3ヵ年計画の第3年次研究助成、座長）
2. 教育番組を中心としたマルチメディア・パッケージの開発（放送文化基金研究助成、研究代表）
3. 教育放送の技術移転の課題—教育用ソフト開発の国際協力（放送文化基金助成、研究代表）
4. トルコ厚生省コミュニケーション・センターの運営に関わる基礎調査—KAP調査を中心にして（第2年次、国際協力事業団によるプロジェクト）
5. 幼児番組国際版マニュアル作成（放送文化基金助成、NHK・フジTVとの共

同研究、共同研究者)

6. 学部教育教材の制作と評価分析 (文部省科学研究費助成、放送教育開発センター研究プロジェクト、共同研究者)

上記は研究助成を得て行なっているものであるが、その他に視聴覚教育の評価の問題、画像コミュニケーションの基礎的研究、授業のモデルの問題、「教育の方法及び技術」の構成に関する研究 (日本教育工学会)、「視聴覚教育メディア研修カリキュラムの作成」(文部省教育メディア分科会)などの研究活動を継続中である。

II. 学会発表等

1. 司会と総括「シンポジウム1 各国のニューメディアと教育」大阪大学創立50周年記念ニューメディア関連国際シンポジウム 大阪富士通関西ラボ 8月21日1989年
2. パネリスト「総括討論」大阪大学創立50周年記念ニューメディア関連国際シンポジウム (東京会場) 上智大学 8月26日1989年
3. シンポジウム司会と発表「コンピュータは放送教育に何をもたらすか——課題の背景と討議の観点」第26回日本視聴覚教育学会・第34回日本放送教育学会合同大会 (於金沢大学、10月8日1989年)
4. 指定討論者「シンポジウム—コンピュータは学校教育を変えられるか」、日本教育工学第5回大会 (於岡山大学、10月10日、1989)
5. 研究発表「明治文学を題材とした総合的インタラクティブ教材の開発—1 開発の前提と評価の諸問題」(佐賀啓男他と連名) 日本教育工学第5回大会 (於岡山大学、10月11日、1989年)
6. 研究発表「明治文学を題材とした総合的インタラクティブ教材の開発—2 ハイパーテキストを利用した教材構成」(浜野保樹他と連名) 日本教育工学第5回大会 (於岡山大学、10月11日、1989年)
7. "Five Years of Cooperation Among Asia—Pacific Nations in Educational Broadcasting," The Symposium on Educational Broadcasting in Asia and Pacific Region, Manila, March 28—30, 1990.
8. "The Trends of Media Use and Educational TV Programs in the World," KIZILCAHAM, Turkey, August 28—29, 1990.

III. 著 作

1. The Development of a Learning Package Composed of Educational

- Television and CD-ROM, Proceedings of The 1989 Symposium on Educational Broadcasting in Asia and the Pacific Region, Curriculum Development Institute of Singapore, 1989, pp. 46-52.
2. 「コンピュータは放送教育に何をもたらすか—課題の背景と討議の観点」第26回日本視聴覚教育学会・第34回日本放送教育学会合同大会論文集、1989年、pp.47-48.
 3. 「外国語（英語）学習における音声と画像を併用したキーワードの利用」、『視聴覚教育研究』第20号 1989年12月 pp.69-89.
 4. 『試行としてのメディア・ミックス教材の開発—第2年次報告書』（文部省助成ニューメディア研究教材開発事業）のうち「前文」、「研究の目的」など担当、3月1990年
 5. 「第15章 視聴覚教育の研究と評価」野津良夫編『視聴覚教育の新しい展開』東信堂 1989年11月 pp.240-259.
 6. 事典項目「教育工学」『新教育学大事典2』第一法規出版 1990年、pp.246-250.
 7. 「今後の学校教育にコンピュータは必要なのか」『教職研修増刊39 学校とコンピュータ読本』pp.51-56.
 8. 「視聴覚教育メディア研修カリキュラム標準案の考え方の背景と留意点」文部省学習情報課編『視聴覚教育指導者講座』1990年 pp.11-13.
 9. 「教育の方法・技術を生かすために」『JAET』（日本教育工学協会）pp.2-3
 10. 「コンピュータの発展・普及は情報化にどのような役割を果たしたか」
 11. 『視聴覚教育』AVEレポートに連載
 - 「家庭教育の中のメディア—『現代の家庭教育』から—」1989年9月、pp.38-39
 - 「ニューメディアと思考—大阪大学五十周年記念国際シンポジウムから—」1989年10月、pp.46-47.
 - 「メニューから選ぶ—モジュールの構成—」1989年11月、pp.38-39.
 - 「フュージョンの時代—境界は教育が判断する—」1989年12月、pp.42-43.
 - 「これからの教育放送—教育と放送との間で—」1990年1月、pp.46-47.
 - 「解かり易さへの接近—『文京文学館』の周辺—」1990年2月、pp.38-39.
 - 「虫(バグ)の発生は人間らしさ—認知理論によるCAI—」1990年3月、pp.45-45.
 - 「コンピュータ・リテラシーは悪い冗談か？」1990年4月、pp.54-55.
 - 「ある放送教育—第五回アジア・太平洋地域教育放送シンポジウムから—」1990年5月、pp.44-45.

「迷子も楽しからずや?—『文京文学館』の第二年次の実験から—」1990年6月、
pp.48-49.

「教育メディアの研修—新『視聴覚教育メディア研修カリキュラム標準案』—」
1990年7月、pp.48-49.

「視聴覚教育メディアの現代性—符号化しにくい情報—」1990年8月、pp.48-49.

「画像の新たな働きを探る—心の図柄の活性化—」1990年9月、pp.42-43.

[エッセー]

「あの頃の視聴覚教育」『京都大学教育学部四十記念誌』1989年 pp.231-233.

「コーヒーは未だですか」『指導と評価』8月1990年 pp.2-3.

IV. 講演等

1. 講義「学校教育と情報化」於国立教育会館筑波分館、9月19日1989年
2. 講演「情報化に対応する学校教育」岩手県教育センター（花巻）、9月28日
1988年
3. 講義「学校教育の情報化」文部省中堅教員研修講座（国立教育会館筑波分館）
10月11日1989年
4. 『日本賞教育番組国際コンクール』審査委員会副会長 11月6日—17日1989年
5. ラジオ放送「教育放送の新たな展開」（NHK第2）10月18日1989年
6. テレビ放送「放送で育つ世界の子どもたち」（NHK教育）11月22日1989年
7. テレビ放送「テレビ自由席—教育放送回顧」11月3日1989年
8. ラジオ放送（民放連盟ネットワーク）「大学公開番組審査評」2月21日1989年
9. 巡回指導「トルコ人口家族計画プロジェクト」（国際協力事業団）11月6日—
12月3日1989年
10. テレビ放送「お母さんの勉強室—世界の環境教育」（NHK教育）1月23日
1990年
11. 研究発表「人口教育におけるIEC」国際協力総合研修所 1月25日1990年
12. 講義「学校教育の情報化」国立教育会館筑波分館 2月13日1990年
13. Intensive Lecture, Problems of Evaluation in Audiovisual Education, JICA
Okinawa Center, March 12-14, 1990.
14. 講演「情報化社会における学校教育」国立教育会館筑波分館 5月16日1990年
15. 講演「情報化社会における教育」文部省社会教育・図書館司書研修会、オリン
ピック記念青少年センター 5月24日1990年

16. 講義「放送教育研究の進め方」佃中学校 6月21日1990年
17. 講義「学校教育と情報化」国立教育会館筑波分館 6月22日1990年
18. 講義「情報化社会における学校教育の課題」長野県教育センター（松本市）6月28日1990年
19. Intensive Lecture, Research and Evaluation of Educational Media Programs, JICA Okinawa Center, July 3-4, 1990.
20. 特別講演「情報化社会における教育者の自主的判断」文部省視聴覚指導者講座、国立社会教育研修所 7月18日1990年
21. 講演「情報化社会における教育の変貌」国立教育会館筑波分館 7月19日1990年
22. 研究発表「IECにおける国際協力—トルコ人口教育の事例から」視聴覚教育全国大会（国際協力総合研修所）7月27日1990年
23. 講演「情報社会と教育」香川県教育センター（高松市）8月1日1990年
24. 講義「放送教育研究と実践の課題」東京都放送教育研究会（於麻布小学校）8月21日1990年
25. 巡回指導「トルコ人口教育プロジェクト」国際協力事業団プロジェクトに関するアンカラ、イスタンブール地域、8月23日～9月2日1990年

V. その他

1. 日本視聴覚教育学会理事、学会誌『視聴覚教育研究』編集委員
2. 日本放送教育学会理事、学会誌『放送教育研究』編集委員長
3. 日本教育工学会理事、運営委員、広報委員、論文賞委員会委員、研究奨励賞委員会委員、研究奨励賞小委員会主査、学会誌『日本教育工学雑誌』編集委員
4. 文部省生涯学習審議会特別委員（1990年8月より）
5. 文部省生涯学習審議会社会通信教育分科会委員（1990年8月より）
6. 文部省生涯学習審議会メディア部会長代理（1990年8月より）
7. 文部省社会教育審議会委員（1990年8月まで）
8. 文部省社会教育審議会教育メディア分科会長（1990年8月まで）
9. 「視聴覚教育研修カリキュラム標準案作成」小委員会委員
10. 国立民俗学博物館情報システム検討委員会委員
11. 国際協力事業団医療協力検討部会委員
12. 放送教育開発センター客員教授
13. NHK学校放送中央諮問委員会委員

14. 全国放送教育研究会連盟研究推進委員会副委員長
15. 「視聴覚教育賞」(文部省・日本視聴覚教育協会) 選考委員
16. 日本映画機械工業会・日本工業標準(J I S) 新規原案作成委員会映写機等小委員会委員
17. 日本視聴覚教具連合会会長
18. 日本教育工学協会理事
19. 教育ソフト開発国際協力会議代表

石本菅生教授

I. 研究活動

- ① 昭和63年度前期放送文化基金助成研究「放送番組を中心とした音声・文字・画像併用外国語パッケージの開発研究」に研究分担者として参加。
「テレビニュース」を学習素材とした日本語学習用音声映像併用C A I システムの開発のシステム開発を担当
- ② 知覚運動過程を重視した書字学習用C A I 開発の試み

II. 著作他

- ① 教師のためのコンピュータ・リテラシー指導と評価、日本教育評価研究会C A I 入門(その5)
—教材ソフト制作のための技能の修得はどう始めればよいか—Vol. 35 No.2
1989
- ② 項目執筆 教育学大事典 第一法規出版

III. その他

- ① 日本視聴覚教育学会理事
- ② 日本放送教育学会理事
- ③ 日本教育工学会編集委員会編集協力者

阿久津喜弘 教授

I. 研究活動

- (1) 「メディア行動」に関する研究
- (2) 教育の「情報化」に関する研究
- (3) 「教育コミュニケーション」研究の体系化

Ⅱ. 学会発表

- (1) 「テレビ番組別の接触行動に関する研究—青年期を中心とした接触要因について」(佐々木輝美・和田正人との共同研究) 日本教育社会学会第41回大会(1989年10月6日～8日、創価大学)
- (2) 「テレビ暴力番組の類型化に関する研究—利用と満足研究の応用」佐々木輝美・和田正人との共同研究) 日本教育社会学会第41回大会(1989年10月6日～8日、創価大学)
- (3) 「社会学から見た日本的コミュニケーションの類型」(レスポンドント) 1990年日本コミュニケーション研究者会議(1990年5月26日～27日、南山大学)

Ⅲ. 著 作

- (1) 「子ども(児童・生徒)の活字文化と映像文化」片岡徳雄編『教師と子どもの間』(シリーズ教育の間 第3巻)ぎょうせい、1990年4月、187-208 頁
- (2) 「映像」「オピニオン・リーダー」「コミュニケーションと教育」細谷俊夫他編『新教育学大事典』第一法規、1990年7月、第1巻 191-193、265-266、第3巻292-293 頁
- (3) 「マスコミ教育」『情報化教育読本』(教職研修総合特集No. 70) 教育開発研究所、1990年8月、128-133 頁

Ⅳ. その他

- (1) 日本視聴覚教育学会理事、編集委員
- (2) 日本放送教育学会理事、編集委員
- (3) 日本教育社会学会評議員
- (4) 三鷹市社会教育委員

佐々木輝美副手

Ⅰ. 研究活動

1. テレビ暴力番組類型化の研究
2. テレビ暴力番組が子供に与える影響に関する研究
3. テレビの利用と満足の研究

Ⅱ. 学会発表

1989年10月、日本教育社会学会第41回大会において、「テレビ暴力の類型化に関する研究」を発表。(阿久津喜弘、和田正人との共同研究)。

同大会において、「テレビ番組別の接触行動に関する研究」を阿久津喜弘、和田正人と共同発表。

Ⅲ. 著 作

「テレビ暴力番組の類型化に関する研究—利用と満足研究の応用—」『放送教育研究』第17号 日本放送教育学会編 1989年12月 65-78 頁

和田正人副手

I. 研究活動

1. メディア接触モデルの研究
2. 対人コミュニケーションの研究

II. 学会発表・参加

1. 1989年9月、日本社会心理学会第30回大会に出席。
2. 1989年10月、日本教育社会学会第41回大会において、「テレビ番組別の接触行動に関する研究」を発表(同大会発表要旨集録 pp.37-38)(阿久津喜弘、佐々木輝美との共同研究、和田が口頭発表)。
同大会において、「テレビ暴力の類型化に関する研究」を、阿久津喜弘、佐々木輝美と共同発表(同大会発表要旨集録 pp.39-40)。
3. 1989年10月、第26回日本視聴覚教育学会、第34回日本放送教育学会合同大会に出席。
4. 1989年11月、日本心理学会第53回大会に出席。
5. 1990年6月、日本心理学会第54回大会に出席。

待鳥敏子副手

I. 研究活動

1. 日本語の読解学習における効果的教授方略に関する研究
2. 「ニューメディア教材の開発事業」におけるハイパーメディアに関する研究
3. 教授活動における日本語教師の実践的能力と授業技術に関する調査研究に協力者として参加
4. コミュニケーション重視の教室活動としての言語ゲームに関する研究

Ⅱ．学会参加

1989年10月、第26回日本視聴覚教育学会、第34回日本放送教育学会合同大会に出席。

森 祐治副手

Ⅰ．研究活動

1. メディア・イメージの認知に関する研究
2. メディアの革新に関する研究

Ⅱ．学会参加

1. 日本社会心理学会（東京女子大学文理学部）1989.10
2. 日本教育社会学会（創価大学教育学部）1989.10
3. 日本コミュニケーション研究者会議（南山大学）1990.5

Ⅲ．論文・著作

『『ラボ』助手から『教育工学』助手へ』『ICU夏期日本語講座論集6』1990
ICU S. P. J.

英語教育研究室

The past year saw a major change in the ETD. Dr. Richard Linde, who, until the arrival of Thrasher and McCagg, was the sole scholar in the department in the area of English language teaching, retired after 31 years at ICU and 18 in the Graduate School. Just before he left ICU at the end of the Spring Term, Dick was honored by his students and colleagues who expressed their thanks for his long and faithful service.

小林栄智教授

1. 研究活動

1. "GLOSSARY to the Middle English Version of *Apollonius of Tyre*" (1989年

2月)の改訂。

2. The Middle English Version of *Apollonius of Tyre*のTextの註解。
3. The Old English Version of *Apollonius of Tyre*のTextの註の改訂。
4. 全面的に改訂された『高等学校英語学習指導要領』にもとづく高等学校英語教科書(3冊のシリーズ)の執筆・編集の仕事を他の5人と共同で進めている。
5. 『講談社和英辞典』(共著)の1976年版を全面的に改訂・増補する作業が進行中。1991年4月からの研究休暇の多くの時間をこの仕事に使うことになりそうである。

II. 学会参加

1. 日本中世英語英文学会東支部研究発表会
2. 日本英文学会
3. 全国英語教育新潟研究大会

III. 著作

1. (共著) *Why English I*, (学図, 1990年, 部分改訂)
2. (共著) *Why English II*, (学図, 1990年, 部分改訂)
3. (共著) *Read English*, (学図, 1990年, 部分改訂)
4. (共著) *Write English*, (学図, 1990年, 部分改訂)
5. "Fashionable Language Educational Theories," 『ニューズレター』No.38, December 10, 1989, 1-3.

IV. その他

1. 日本英語学会・評議員, 1983~.
2. 日本中世英語英文学会, 評議員, 1987~.

F. C. パン教授

I. 研究活動

My research in 1989 has been the same as it was in 1988 in that I continued to concentrate on neurolinguistics, general linguistics, and sign language; in so doing, my activities fall naturally into six categories: (1) textbook writing; (2) conference organizing; (3) paper presentations; (4) research grants; (5) LSSI; and (6) clinical works.

In the first category, I have now come to the stage of editing the first six books

of the Textbook Series in Linguistics and Applied Linguistics which will be published by Whurr Publishers. They are : (i) *Introduction to the Study of Language* (edited by Bates L. Hoffer and Fred C. C. Peng) ; (ii) *Introduction to Phonology: Analysis, Description, and Comparison* (edited by Toby Griffen and Fred C. C. Peng) ; (iii) *Introduction to Morphology : Analysis, Description, and Comparison*, Volume I and Volume III (edited by David Laockwood and Fred C. C. Peng) ; (iv) *A Brief History of Syntax : Syntactic Theories in Historical Perspectives* (edited by James W. Ney and Fred C. C. Peng) ; and (v) *Foundations of Syntax : An Advanced Study of Current Theories in Syntax* (edited by James W. Ney and Fred C. C. Peng). They were originally scheduled to appear in 1990 but due to individual contributors problems in getting their manuscripts ready, the publications would be delayed until 1991.

In the second category of my activity, I organized the 15th Annual Conference of the Language Sciences Association of Japan (July 29–30), in which about 80 scholars and graduate students took part, as well as two other conferences ; namely, the 11th Annual Conference of the Neurolinguistic Association of Japan (November 25–26) and the Special Lecture Series by Dr. Michael Halliday and Dr. Ruqaiya Hasan (September 4–5). In the former, we had the pleasure of inviting a world–renowned neuroscientist, Dr. Ennio De Renzi of Italy, who is also the Editor of the famous journal called *Cortex*. In the latter, Dr. Halliday and Dr. Ruqaiya gave two lectures each, which were entitled : “Society in Language” (by Dr. Ruqaiya Hasan, September 4) ; “Register Variation in English” (by Dr. Michael Halliday, September 4) ; “The Nature of Grammar” (by Dr. Michael Halliday, September 5) ; and “The Nature of Discourse (by Dr. Ruqaiya Hasan, September 5). In each of these two conferences there were about 80 participants.

As part of the third category of my activity, I also presented various papers at the conferences mentioned above, including the attendance of the LACUS Forum held in Kingston, Ontario, Canada (August 15 to 20). The papers will be listed individually below later.

I also obtained three research grants from the Government of the Republic of China, two of which were from the Department of Health and the remaining one from the National Council of Sciences; namely, (1) Epilepsy and Language Disorders, (2) Parkinson’s Disease and Language Degenerative Disorders, and (3)

Recovery from Aphasias ; they were the continuations of the researches started in 1988, except for the third one which was a new grant to conduct a longitudinal and cross-sectional study on the effect of recovery procedures on aphasic patients. The purpose was to compare the differences of recovery patterns in respect to whether aphasic patients would recover on their own, as some scholars have observed, or would recover faster if speech therapy was applied to them. In the case that therapeutic treatments were to be provided, we also wanted to know whether different therapies would produce different results in the process of recovery. A fourth research grant was pending which when granted would enable me to conduct research on child epilepsy which has a different pattern from adult epilepsy.

The 1989 LSSI as the fifth category of my activity was a significant one in that I was able to invite three overseas scholars, Dr. Bates Hoffer, Dr. Ruth Lesser, and Prof. Terry Threadgold to share the teaching as visiting faculty of the Institute. Dr. Lesser was a British Council Scholar invited by me to represent the British Scholarship in Psycholinguistics. In addition, Dr. John Maher and I joined the LSSI to represent the ICU.

One important innovation of the 1989 LSSI was to continue the successful Institute on Language Pathology and Speech Therapy which had been launched in 1988 and to create a new course called Writing Medical Papers in English which was taught by Dr. Maher ; I also offered a course on Introduction to Sign Language Studies. The whole LSSI lasted from July 17 through August 4 for a total of three weeks while everybody else in the university was on vacation in the midst of the hot summer.

Finally, because of the grants mentioned above which I received, I had to conduct not only research but also saw epileptic, Parkinson's, and aphasic patients for neurolinguistic testings. One reason for the clinical works was to prepare ourselves for grafting neural tissues onto Parkinson's patients' dysfunctional substantia nigra in 1992 after an experimentation on animals becomes available in 1991. Two largest teaching hospitals, the General Veterans Hospital in Taipei and Taichung, are providing me with the necessary facilities and manpower, an asset that began in 1987. One of the aims was to present five papers in 1990 for the Second International Conference of Neurolinguistics which would come out of our

researches.

Ⅱ. 学会発表

1. 「琉球語首里方言調査に基づく音韻体系と形態分析についての一考察」(A Study on the Phonology and Morphology of the Shuri Dialect of the Ryukyu Language), July 29, 1989, with Takamura Tomoko and others, the 15th LSAJ.
2. The Application of the Comparative Method to Japanese Dialects, July 29, 1989, with Virginia M. Peng, the 15th LSAJ.
3. 'Compounding' in Japanese Sign Language', July 29, 1989, with Daisuke Hara, the 15th LSAJ.
4. Language in Dementia : Barriers in Communication, November 26, 1989, the 11th NAJ.

Ⅲ. 著作と発表・論文

- 1989a "The Interface of Sociolinguistics and Neurolinguistics : Towards a Theory of Socio-Neurolinguistics," in *Language in the Individual and Society*, pp.3-23, Fred C. C. Peng, Virginia M. Peng, Hidefumi Miyake, Makoto Sasaki, and Tetsuta Watanabe (eds.), Hiroshima : Bunka Hyoron Publishing Company.
- 1989b *Language in the Individual and Society*, edited with others, Hiroshima : Bunka Hyoron Publishing Company.
- 1989c "Preface," in *Language in the Individual and Society*, pp.iii - vi.
- 1989d *Language Sciences*, Vol. 11, No. 1 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989e *Language Sciences*, Vol. 11, No. 2 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989f *Language Sciences*, Vol. 11, No. 3 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989g *Language Sciences*, Vol. 11, No. 4 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989h *Journal of Neurolinguistics*, Vol. 4, No. 1 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989i *Journal of Neurolinguistics*, Vol. 4, No. 2 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989j *Journal of Neurolinguistics*, Vol. 4, No. 3 Editor, Oxford : Pergamon Press.
- 1989k *Journal of Neurolinguistics*, Vol. 4, No. 4 Editor, Oxford : Pergamon Press.

Press.

R. H. スラッシャー教授

My principal research continues to be in the area of language testing. One of my main interests during this year has been the utilization of item response theory (IRT) in testing programs here in Japan. In early April I attended the RELC Regional Seminar on Language Testing and Language Program Evaluation in Singapore. There I read a paper co-authored with Mr. Katsumi Yuasa of the International Language Centre, Tokyo entitled *From Classical Test Theory to Item Response Theory: A Case Study*. Work continued in the project to analyze the decline in the English proficiency of Japanese company entrants. A revision of the YMCA Test of English Proficiency (Y-TEP) was undertaken and the new version (in six parallel forms) is to be completed in 1991. The YMCA Interview Test was also revised and pretested during the year. The revised format will be used beginning with the Feb. 1991 administration.

ピーター・マッキャグ準教授

Book Chapter

1. "Toward understanding coherence: A response proposition taxonomy" in *Coherence in Writing: Research and Pedagogical Issues*, Ulla Connor and Ann Johns (Eds.) TESOL: Washington D.C. pp.111-130. (Previously listed as "In Press")

Articles

1. "The social and academic contexts for English language learning at ICU with special emphasis on the Study English Abroad (SEA) programs" in *ICU Language Research Bulletin* Volume 4, Number 1. 1989. pp.21-38.
2. "Staff development activities in ICU's English Language Program" in *Daigaku Kyoin no Miryoku Kaihatsu*. Inter-University Seminar House. 1990. pp.167-203.
3. "Kokusai Kirisutokyo Daigaku ni okeru Eigo Kyoiku" in *IDU* Number 317. 1990. pp.43-46.

Presentation

1. "Features of discourse and perception of coherence" 1989 JALT Conference

ウィリアム・スキッパー準教授

1. Research Activities :

During the year I completed an edition and study of a fragmentary cartulary from Combwell Priory (Co.Kent), consisting of 25 previously unpublished documents detailing some of the priory's possessions and income from about 1180 to about 1350. This is to be published in *Archaeologia Cantiana* (the annual journal of the Kent Archeological and Historical Society. In addition I collated another dozen manuscripts for my critical edition of Rabanus Maurus's *De rerum naturis* (Books 1-3), and completed several notes on various philological and historical topics.

2. Conferences Attended :

I attended one conference of any significance, namely the annual meeting of the Medieval Academy of America, this year held in Vancouver at the beginning of April. During the conference I took part in a session on "Teaching the Middle Ages in Pacific Rim Countries", speaking on "Teaching Old English in Japan: A Personal View."

3. Publication :

"The Early Dictionaries of Old English and the Worcester Tremulous Scribe" *Language Research Bulletin* (Tokyo 1990), 5: 81-98.

"Rabanus Maurus, *De rerum naturis*: A Provisional Checklist of Manuscripts," *Manuscripta* 33:2 (1989) 109-118.

"A Ghost Word in the Peterborough Chronical (*ihyder*)," *Notes and Queries* 231 (forthcoming).

ジョンC. マーハ準教授

Conferences Attended :

1. Nihon Gengogakkai (Japan Association of Linguistics, 100th Anniversary

Conference). Tokyo University, June 2 – 3 , 1990.

Papers Read at Conferences :

- 1 . Tokyo Gaikokugo Daigaku (Tokyo Foreign Language University).
“Images of Japanese”. June 2,1990.
- 2 . The National Language Research Institute, Tokyo. “Four Lectures on Applied Linguistics”, May 7–June 10,1990.
- 3 . Language Sciences Association of Japan. “Freud and Linguistic Theory” (Paper read with Aya Nishizono—Maher M.D.). Sixteenth Annual Conference, ICU, 28–29 July, 1990.
- 4 . Seishin Joshi Daigaku (Sacred Heart University), Tokyo, “Language in Society”. A series of lectures given in the Department of Psychology: May–July, 1990.

Publications

BOOK

International Medical Communication. Edinburgh: Edinburgh University Press. 1990. 176pp. Paper. (Cited in 1989—publication delayed).

PAPERS

1. “So what did you do today?: Story—Telling in the Family: A Discourse Analysis. In T. Shimaoka and Y. Yano (Eds.). *Studies in Applied Linguistics*. Tokyo: Liber Press. 1990. pp.71–77.
2. “Language and the Professions”(with Denise Rokosz), R. Kaplan and W. Grabe (Eds.) *The Development of Applied Linguistics*, New York : Harper and Row. 1990 Chapter VIII.
3. “Talking to Adolescents.” *Language Sciences*, Vol.12, 1990. (in press).

Work in Progress

1. Studies of morphology and Spanish loan words in Philippine Creole (Chabacano). (Paper submitted to the *Linguistic Studies—Linguistics Association of Japan*).
2. Multilingualism and minority language maintenance in Japan: especially Ainu and Korean.

- (a) Conference in Preparation "Towards a New Order: Languages and Diversity" under the sponsorship of the Asian Cultural Studies Institute.
- (b) Studies of Ainu Language Maintenance. (Paper submitted to *Language and Society*).

道又 爾 研究員

1. 研究活動

1990年10月開催の日本教育心理学会第32回大会（於大阪大学）での発表のための実験の実行と原稿の執筆。

発表題目：「ストループ型干渉課題における大脳半球機能の非対称性」

2. 学会発表

「2種類のラテラルリティ課題における刺激鮮明度の影響と半球間相互作用」

1989年11月29日，日本心理学学会第53回大会（於筑波大学）

3. 論文・著作

Hellige, J.B. and Michimata, C. (1989)

Visual laterality for letter comparison: Effects of stimulus factors, response factors and metacontrol.

Bulletin of Psychonomic Society, 27(5), 441-444

Hellige, J.B. and Michimata, C. (in press)

Categorization versus distance: Hemispheric differences for processing spatial information. *Memory and Cognition*.

4. その他

1990年3月までICUにて「心理学研究法」を分担指導。

本務校の明治学院大学にて「教育心理学」及び「児童心理学」の講義を担当。

岩佐 玲子 研究員

I. 研究活動

1. ニューメディア教材の研究開発事業(文部省教育改革の推進に関する研究依頼・日本視聴覚協会，3カ年計画の第3年次研究助成，研究協力委員)

2. 幼児番組国際版マニュアル作成（放送文化基金研究費助成，NHK・フジTVとの共同研究，共同研究者）
3. 遠隔教育及びコミュニケーション過程の理論的，文献的，応用的研究（放送教育開発センター研究プロジェクト，共同研究者）
4. 英語読解力向上をめざす語彙学習用CAIの開発のための基礎的研究（文部省科学研究費補助金奨励研究A，研究代表者）

上記は研究助成を受けて行なっているものであるが，その他に，学校教育と教育機器の関係についての調査ならびに大学における教授技術の評価に関する研究なども継続して行なっている。

II. 学会発表等

1. 研究発表 「FD評価表と質問票をもとにした講義改善の試み」
日本教育工学会第5回大会（於岡山大学，10月10日，1989）
2. 学会参加 The symposium on Educational Broadcasting in Asia and Pacific Region, Manila, March 28-30, 1989.
3. 司会と発表 「教育機器の導入にからみた教育革新の構造に関する研究(1)」
第15回CAI学会研究発表大会（於工学院大学，8月30日，1990）
4. 研究発表 「教育工学関連授業に対する学生評価の分析」
日本教育工学会第6回大会（於千葉大学，9月30日，1990）
5. 研究発表 「教育機器の導入にからみた教育革新の構造に関する研究(2)」
第27回日本視聴覚教育学会・第35回日本放送教育学会合同大会（於品川きゅりあん，10月5日，1990）

III. 著作

1. 「FD評価表と質問票をもとにした講義改善の試み」『日本教育工学会第5回大会発表論文集』1989年 pp.219-222
2. 「英文読解力向上をめざす語彙学習用CAIの開発のための基礎的研究」『CAI学会誌』第7巻 第2号 1990年 pp.54-68.
3. 『英語読解力向上をめざす語彙学習用CAIの開発のための基礎的研究（課題番号：63790045）研究成果報告書』1990年3月
4. 「子どもの個性を引き出す道具としてのコンピュータ」『児童心理』1990年6月号 pp.124-127.

5. 「教育機器の導入にからみた教育革新の構造に関する研究(1)」『第15回C A I学会研究発表大会論文集』1990年 pp.221-224.
6. 「教育学関連授業に対する学生評価の分析」『日本教育工学会第6回発表論文集』1990年 pp.441-442.
7. 「教育機器の導入にからみた教育革新の構造に関する研究(2)—機器の台数と利用状況の関係について—」『第27回日本視聴覚教育学会・第35回日本放送教育学会合同大会発表論文集』1990年 pp.21-22
8. 「The Developoment of a Learning Package Composed of Educational Television and CD-ROM」(中野照海他と連名)『視聴覚教育研究』第21号 1990年(掲載予定)

原 和子研究員

1. 研究活動

帰国子女の追跡調査

教育研究32発表の「海外・帰国児童生徒教育の一考察」に続くものとして、第二次世界大戦下の帰国子女学級(東洋英和女学院別科)卒業生を対象に、異文化体験の意味とその影響について、インタビューによる追跡調査を実施中。

2. 学会発表・参加

- ・異文化間教育学会 第11回大会参加
5月25日, 26日 於放送教育センター。
- ・日本化学会 教育部会。

塚本美恵子研究員

1. 研究活動

新しい環境への適応—転校生の場合—(小平記念研究助成)調査を昨年引き続き実施

2. 学会発表・参加

- (1) 研究発表・第11回異文化間教育学会(1990年5月25・26日)にて「米国ゴルフ短大日本人研修生の異文化体験による変化(2)」を発表
- (2) 22nd International Congress of Applied Psychology(1990年7月22-27日, 京都国際会議場)にてシンポジウム“Helping Adults and Children with the

Adjustment”で「Mother and Child Adjustment」と題した発表を行った。

- (3) 記念シンポジウム「旅・異文化・人生」(1990年1月15日) 於東京・学士会分館) に参加
- (4) 第48回国際心理学者会議 (ICP) (1990年7月14-18: 新宿ワシントンホテル) に参加

3. その他

- (1) 埼玉県国際理解促進資料作成委員として手引き書“国際交流のすすめ”を作成
- (2) 研究レポート「子どもたちの適応」「海外子女教育」1990年1月号, 2月号. 海外子女教育財団
- (3) 講義「異文化適応について」エリエール・インターナショナル
ゴルフプログラム 5月9日
- (4) 「文化と人間」の会幹事
- (5) 日本英語検定協会面接員

川津茂生助手

研究活動

1. 対称パターンの知覚処理過程に関する研究。

学会発表・参加

1. 「対称性の中の非対称性vs非対称性の中の対称性—SEARCH ASYMMETRY—」
日本心理学会第53回 (1989年11月28-30, 筑波大学) 大会発表文集 P.579 (川津茂生, 横澤一彦の連名発表)
2. 「対称性と全体的 (ホリスティック) 知覚—その2」日本心理学会第54回大会
(1990年6月1-3日, 東京都立大学) 大会発表論文集 P.503
3. 日本基礎心理学会第9回大会 (1990年4月22,23日, 慶応大学) に参加
4. 日本認知科学会「パターン認識と知覚モデル(P&P)」研究分科会 (1990年6月16日, 上智大学) に参加

論文

1. Dissociability of color and location in the perception of symmetry (accepted).

3. 大学院教育研究科修士論文

1990年3月卒業者

A. 教育哲学

- | | |
|----------|--|
| 1. 目黒 賢哉 | 教育における比喩の役割 |
| 2. 深谷 潤 | カール・ヤスパースの〈哲学的信仰〉に関する一考察
—その教育哲学的意義をめぐって— |

B. 教育心理学

- | | |
|-----------|--|
| 3. 中川 泉 | 中高年の運動体験に関する質的分析
—26名の面接調査より— |
| 4. 藤田 宏紀 | 「間を取る」概念の明確化に向けて
—フォーカシング技法における“clearing a space”段階の検討— |
| 5. 北嶋 美枝 | 在日韓国・朝鮮人のエスニック・アイデンティティに関する
—研究 |
| 6. 工藤 博 | ペルー国リマ市における国内移住者の精神衛生に関する一研究 |
| 7. 野末 武義 | 健康な家庭システムの発達過程に関する事例研究 |
| 8. 鷲見恵美子 | Wynneの偽相互性理論に関する一研究
—合意ロールシャッハ法による家庭事例の分析と共に— |
| 9. 服部 純子 | 先住者のカナダへの移住がもたらした和歌山県三尾住民の社会意識の変容 |
| 10. 早川 枝里 | 青年女子の母親イメージの発達と自我同一性に関する一考察 |

C. 視聴覚教育法

- | | |
|-----------|--|
| 11. 駒井 利江 | 外国語としての日本語教育のためのコンピューターを用いた漢字書字教授技法に関する実験的研究 |
| 12. 鈴木 美加 | 外国語としての日本語の読解学習における先行オーガナイザーの効果に関する研究 |
| 13. 高木 裕子 | 日本語読解教材の難易に関する研究 |

- ーリーダビリティー公式研究作成の基礎としてー
14. 郭 育適 An Empirical Study of the Effects of Picture—Word Consistency on Recall of Verbal Contents in Print Advertisements

D.英語教育法

15. ヘイター
バリー Japanese Cultural Orientation as a Factor in Language Learning
16. 佐々木 真 On the Ideational Differences among the Three English Translations of *The tale of Genji* in Terms of the System of Transitivity in the Systemic-functional Grammar
17. 石田名都子 A Study of the Structure of Newspaper Editorials
18. 宍戸 敏彦 A Study of Meaning and Form of the English Complements
19. 高垣 俊之 A Study on Motivation: Oral Proficiency in English

1990年6月卒業者

A.視聴覚教育法

1. 樋浦 小静 CAIドリルにおける反応時間フィードバックが基礎的技能の自動化に及ぼす効果に関する実証的研究
インターナショナルスクールの日本語教育の場合
2. 高嶋真理子 日本語教育における漢字学習に関する実証的研究
—部首の説明に対する挿入質問の効果について—

B.英語教育法

3. 井手英津子 性格と英語の熟達度との相関関係

4. 大学院教育学研究科博士論文

1990年6月卒業者

A. 英語教育法

1. ^{バミロ}エドモンド The Place of Linguistics in the Study of Literature: A Textliguistic Analysis of the Novels Written by Two Prominent Nigerian Authors, 'Wore Soyinka' and 'Chinua Achebe'
2. 斎藤くるみ The Nominal Modification in Old English Prose

5. 教育実習報告

1. 教育実習報告

1990年度には78名の学生が参加した。その詳細は次のとおりである。

- 1) 実習生総数 78名

男	子	19名
女	子	59名

- 2) 実習日程及び実習校

5月7日～5月19日	芦北町立湯浦中学校（熊本）
5月14日～6月2日	筑波大学附属高等学校（東京）
5月28日～6月9日	敬和学園高等学校（新潟）、千葉県立銚子高等学校、長野県立屋代高等学校、大分県立大分上野丘高等学校
6月1日～6月14日	国際基督教大学高等学校（東京）、神奈川県立横浜翠嵐高等学校、平和学園高等学校（神奈川）、東邦大学附属東邦高等学校（千葉）、埼玉県立吉川高等学校、大阪府立長尾高等学校
6月4日～6月16日	都立武蔵野北高等学校、都立戸山高等学校、都立小石川高等学校、都立白鷗高等学校、都立国立高等学校、

調布市立調布中学校，三鷹市立第三中学校，練馬区立開進第二中学校，渋谷区立松濤中学校，筑波大学附属盲学校，恵泉女学園高等学校，桜美林高等学校（東京），横浜市立万騎が原中学校，横浜市立名瀬中学校，横浜市立山内中学校，神奈川県立追浜高等学校，湘南白百合学園中学校（神奈川），浦安市立浦安中学校（千葉），静岡英和学院中・高等学校（静岡），茨城県立多賀高等学校，茨城キリスト教学園高等学校，常磐女子高等学校（茨城），宇都宮市立雀宮中学校（栃木），福島県立福島高等学校，福島県立原町高等学校，郡山ザベリオ学園中学校（福島），北陸学院高等学校（石川），神戸海星女子学院（兵庫），滋賀県立膳所高等学校，大分県立国東高等学校，山梨県立甲府昭和高等学校，山形県立新庄北高等学校，埼玉県立浦和第一高等学校

- 6月6日～6月19日 広島大学附属福山高等学校
- 6月7日～6月20日 駒場東邦高等学校（東京）
- 6月11日～6月23日 三鷹市立第五中学校，三鷹市立第七中学校，女子学院中・高等学校（東京），横浜国立大学教育学部附属横浜中学校，横浜市立谷本中学校（神奈川）
- 6月15日～6月28日 フェリス女学院中学高等学校（東京）
- 6月18日～6月30日 岐阜県立大垣北高等学校
- 6月25日～7月7日 横浜国立大学教育学部附属鎌倉中学校（神奈川）
- 8月25日～9月7日 宮城学院高等学校（宮城）
- 8月27日～9月8日 仙台市立将監中学校（宮城）
- 9月3日～9月15日 静岡県立磐田南高等学校
- 9月3日～9月17日 海城中学・高等学校（東京）
- 9月4日～9月17日 静岡県立藤枝東高等学校
- 9月5日～9月18日 日本大学第二高等学校（東京）
- 9月10日～9月22日 静岡県立浜松北高等学校，清水町立南中学校（静岡）
- 10月1日～10月13日 西南女学院中学校（福岡）
- 10月8日～10月20日 川崎市立宮崎中学校（神奈川），都立南多摩高等学校，明治学院高等学校（東京）

11月1日～11月14日 明星学園中学校（東京）

3) 実習参加学生学科別内訳

学 科	性 別		計
	男	女	
人 文 学 科	3	7	10
社 会 学 科	3	14	17
理 学 科	6	3	9
語 学 科	2	18	20
教 育 学 科	5	13	18
比較文化研究科	0	1	1
教育学研究科	0	2	2
理学研究科	0	1	1
聴 講 生	0	0	0
合 計	19	59	78

4) 実習生教科別内訳

学 科	性 別		計
	男	女	
社 会	3	9	12
理 学	5	2	7
数 学	1	1	2
英 語	10	46	56
宗 教	0	1	1
合 計	19	59	78

2. 教員免許状取得状況報告

1990年3月卒業生425名（学部370名，大学院55名）の内，一括申請により教員免許状を取得した学生は次のとおりである。

1) 教養学部学科別教免取得学生数（聴講生は除く）

性 別 学 科	取得者実数	中一種	高一種
人文科学科	5	1	5
社会科学科	6	5	6
理 学 科	12	10	12
語 学 科	19	18	19
教育学科	20	13	20
合 計	62	47	62

2) 教養学部教科別教免取得学生数（聴講生は除く）

教 科 種 別 学 科	社 会		理 科		数 学		英 語		宗 教	
	中一	高一	中一	高一	中一	高一	中一	高一	中一	高一
人文科学科		2					1	3		
社会科学科	3	4					2	2		
理 学 科			6	8	4	4	1	1		
語 学 科							18	19		
教育学科		1					13	19		

3) 大学院教免取得生数

研究科 専攻科		種 別			
		中 一	高 一	中 専	高 専
教育学研究科	教育哲学専攻 教育心理学専攻 英語教育専攻 視聴覚教育専攻	1	1		3
行政学研究科	行政学専攻				
比較文化研究科	比較文化専攻				
理学研究科	基礎理学専攻				4

※中・高一種免許状取得者は院在籍聴講による